Vol.79
2020年
青葉号

社会福祉法人 みなと福祉会報

明日をつむぐ

特集

事業所紹介⑤
あしたの家

詳細記事はP4～5

- 2020年度みなと福祉会 事業計画 ……P2
- 30周年企画① イルカ作業所開設のころ …P3
- 新しい仲間をむかえて ……P6

発行：社会福祉法人みなと福祉会
〒455 － 0803
愛知県名古屋市港区入場１丁目114番地１
TEL. 052-355-8000　FAX. 052-355-8008
http://www.minato-fukushikai.jp

2020年度 みなと福祉会事業計画

今年度は、2014年にわが国も批准した「障害者権利条約」についての国連での審査がおこなわれ、9月には勧告が出されます。注意深く見守り、運動のバネにしていきたいものです。

一方、昨年から議論されてきた「全世代型社会保障改革」の最終報告が夏には出される予定になっています。医療や年金、介護など全般にわたり給付の引き下げと負担増が予想されます。加えて今年度は、私たちの事業運営に直接影響する介護報酬の見直しの年でもあります。生活介護や、「食事提供加算」「送迎加算」についても厳しい議論が見込まれています。

そんな流れを許さない、大きな声を現場から広げていきましょう。

〈重点課題〉

法人設立30年をむかえ次の5年に向かう計画をつくり、これからを切りひらいていく職員集団と運営をすすめる組織体制を確立させていこう。

①職員の採用を計画的にすすめ支援と事業運営に向かう安定的な体制をつくっていこう。

②事業の継続、発展のために財政基盤を確立させていこう。

③2021年度からの5か年の事業計画を関係者みんなの英知でつくっていこう。

〈事業面での計画〉

1 各日中事業所の事業の特色を確立させ支援を充実させていきます。それぞれ新しい利用者を受け入れる体制をつくっていきます。

2 3年目をむかえるあしたの家については、生活介護の利用者とグループホームの開所日数をふやしていきます。

3 グループホームについては、職員体制を安定させ働き方の改善をすすめます。入居者にとって、よりくらしやすい環境や支援を追求していきます。

4 放課後等デイサービスについては、新しい利用者の確保とニーズにこたえられるような支援をすすめていきます。また区分の見直しの推進などで報酬制度の改悪をはねかえせるようにしていきます。

5 ネットワークみなとについては、グループホームへのヘルパー派遣について検討していきます。

6 相談支援事業については、あしたの家に集中し体制の立て直しをはかります。また今後の相談支援事業のあり方を検討していきます。

7 利用者の自治活動について、事業所支援や運営に利用者の意思が反映されるようなシステムを検討していきます。

8 防災のとりくみとして、毎月設定する「防災の日」に様々なとりくみをおこないます。福祉避難所の設置・運営の具体的な計画と法人の「事業継続計画（BCP）」を策定していきます。

〈運営・経営の計画〉

9 就活サイト等を活用し職員の計画的な採用と定着をすすめます。また病休者や退職者を出さないようにするという観点から、仕事上の悩みなどを日常的に相談できる体制をつくります。

10 職員の研修を計画に基づきすすめます。また、これからの事業運営を担っていく幹部職員の育成を計画的にすすめていきます。

11 ひきつづき労働条件の整備をすすめます。とりわけ准職員や嘱託職員の賃金や休暇制度などの見直しをすすめます。

12 持続可能で夢のある事業の展開ができるよう経営基盤の安定をはかっていきます。

13 法人本部機能の充実と理事会・評議員会の定期開催をおこないます。

〈制度改善などにむけた運動と地域とのつながり〉

14 障害者権利条約の精神に基づいた法整備や制度改善がおこなわれるよう、関係団体と共同して運動をすすめます。

15 法人設立30年を記念する行事を利用者、家族、職員の実行委員会にて企画し実行していきます。

フレッシュな新人職員をむかえて

30周年企画 Part1

イルカ作業所開設のころ

みなと福祉会は、1990年10月に法人認可をうけました。今年10月で30年を迎えることになります。そこで今号から、それぞれの事業所の開所当時に大切にしていた思いやエピソードなど当時を担ってきた方からメッセージをいただきます。みなさんでこれまでのあゆみをふりかえってみませんか。

1回目の今回は、「イルカ作業所開設のころ」編です。

発祥の地は現在の本部センター

30年ほど前、三軒長屋の一角（現みなと福祉会・育つ会センターの場所）を借り、無認可のイルカ共同作業所として運営していました。下請け（箱折、ボルト通し）や、洗濯ばさみの組み立てなどの仕事をおこない、10名ほどの仲間が毎日元気に通い過ごしていました。また、休日には畑での芋掘り、運動会、クリスマス会などの行事をみなと日曜学校と合同でおこなっていて、その頃私は学生ボランティアとしてかかわっていました。運動の積み重ねにより念願だった認可作業所ができることを知り、職員として働くことを決めました。

1991年4月、通所授産施設イルカ作業所がスタートしました。開所当初は仲間も職員も新しい環境の中で落ち着かず毎日が嵐のように過ぎていきました。私も社会人1年生で仲間と1日過ごす事が精一杯でした。そんな中で、「どんなに障害が重くても働く場を」と労働を軸に活動を展開していきました。仕事は洗濯ばさみ、ふきん、陶芸などの自主製品づくり、箱折などの下請け作業を主におこなっていました。給料を何とか上げていきたいと試行錯誤を繰り返していました。仲間のボーナス支給のために商品カタログをもって団体回りをしたりもしました。働くことで社会の一員として役割を果たすということも大切にしてきました。生活の中で経験を積み重ねていけるようにと、キャンプ等泊まりの行事、運動会を家族の皆さんにも参加していただき近くの公園でおこなっていました。家族の皆さんとのつながりも大事にしていました。時代といってしまえばそうなのかもしれませんがアットホームな雰囲気で、仲間を真ん中にしてみんなで一緒に考え、つくっていたように思います。

長くかかわる人がいること、受け継がれていくことが財産に

私自身も仲間、職員、家族に支えてもらい働き続けることができました。食事をなかなか食べてくれなかったり、パニックになってどう対応していいのかわからなかったりと仲間との関わりに悩み行き詰った時もありました。悩みながらも関わる中で見えてくることもあり、「あっそうだったんだ」と共感できた時の喜びや、職員集団の中で悩みを共有し一緒に考え実践する中でつかんできたこともあります。20代の仲間が多かったので自宅で暮らすことも大変なことが多く、大変さを共感し作業所でできることは何か考え、また家族に返していく中で信頼関係を深めてきました。そのことをとおして、たくさんのことを学ばせてもらいました。まさしく共に育ちあうことができていたのではないかと思います。

イルカ作業所を開所して30年を迎えようとしているところで、その頃の仲間たちと新しい職場で再び出会う機会をもらいました。お互いに年を取りましたが、その頃を知っているからつながることもあり、今かかわる人達に伝えていくことができることがあると感じています。その人が過ごしてきた背景を知ることが今を知ることになり、これからの人生を一緒に考えていけるのだと思います。長くかかわる人がたくさんいること、受け継がれていくことが財産になるのではないかとも思います。時代は変わり仲間を取り巻く環境は変わってくると思います。長いようで短かった30年、その時その時を一生懸命に頑張ってきましたが忘れてしまうことも多々あります。そんな中でも自分の人生の主人公として生きていくために、この積み重ねを次の10年20年につないでいくことが大切なのだと、あの頃を振り返りながら改めて感じています。

（あしたの家副所長　眞鍋道子）

無認可時代のイルカ共同作業所

運動会